

二人三脚で独立開業 空き家を改装した家族葬会館を開設

(株)庄東葬祭

[富山県砺波市]

2021年4月、富山県砺波市に新たな葬儀社が誕生した。市内の他葬儀社に勤めていた2人が独立開業した「庄東葬祭」である。7月には空き家を改装した家族葬会館「ホームセレモニー苗加邸」を開設し、砺波市内でもニーズが拡大している小規模な葬儀に対応する。会社設立、会館開設の背景と、現状について話を伺った。

富山県砺波市は、庄川と小矢部川が形成する砺波平野のほぼ中央に位置する。2021年11月末現在、4万7,649人の人口を擁する同市は、日本の原風景を彷彿させる町としても有名で、その背景にはおよそ220km²の広さに屋敷林に囲まれた7,000戸を超える家が点在する“散居村”と呼ばれる景観が広がる砺波平野ならではの特徴がある。しかし、昨今は、農業と散居村との関連性がしだいに薄くなり、貴重な散居村や屋敷林が減少しかねない状況が危惧されている。

その砺波市で、21年4月に新会社を設立し、空き家を活用した家

族葬会館をオープンさせたのが庄東葬祭である。

葬儀に対する想いが一致し 2人で新会社を設立

同社は、他の葬儀社で長年勤務していた川岸範裕氏と三澤遼氏の2人によって立ち上げられた。

遺族と接するなかで、「自分なりのやり方で、親身になってご遺族の要望にお応えしたい」という想いが生まれ、同じ会社の先輩・後輩であった両氏の考えが一致したことから独立を決意。3年ほど前から2人で構想を練り、20年度末に勤めていた葬儀社を退職、21年

■(株)庄東葬祭の概要

所在地/富山県砺波市苗加 434-2

設立/2021年4月

代表者/川岸範裕



4月22日に新会社を設立した。新会社では、川岸氏が社長、三澤氏が専務を務める。

その後5月に物件購入、6月に改装工事、7月下旬には内覧会を開催するなど、急ピッチで会館開設までの準備が進められた。

砺波市での開設を選んだ理由としては、実家が市内で葬儀社を営んでいるという川岸社長の「生まれ育った故郷の葬儀に携わりたい」という思いからだ。

会館を開設するにあたっては、一般葬対応の会館をつくるという案もあったそうだが、条件に見合う物件・土地探しに難儀したこと、一般葬を2人で施行することの負担などを鑑みて家族葬に特化した会館開設に至ったという。それに加えて、コロナ禍以前の砺波市の葬儀は大半が一般葬であったことから、家族葬専用の会館は存在しなかった。しかし、コロナの影響で人が集まれなくなると家族葬が普通のこととして受入れられ



1



- 1 2021年7月24日にオープンした「ホームセレモニー苗加邸」
- 2・3 式場（最大30席）は、机を並べて会食室としても利用可能
- 4 遺族控室（8畳）
- 5 キッチンも打合せスペースとしても利用する
- 6 正面玄関

るようになり、そちらを選択する人がふえてきたことも判断材料の1つとなったようだ。

開設地を選定する際、「空きテナントを取得」「田畑を購入・整備して新築開設」などさまざまな可能性を模索していたが、間取り、金額、立地、駐車スペースなどの条件をすべて満たす物件・土地はなかなか見つからなかったという。

そうしたなかで出会ったのが、木造2階建てで築45年ほどの一軒家。空き家となっていたものを購入し、改装を施して7月24日に開設したのが「ホームセレモニー苗加邸」である。

JR城端線東野尻駅より車で2分、北陸自動車道砺波ICより同3

分の県道20号沿いに位置し、会館の裏側には富山・石川間を結ぶ国道359号が通っていることから、アクセス、視認性ともに好条件。

1階には最大30席ほど設置できる式場のほか、遺族控室、導師控室、キッチン、バスルームなどを配置し、2階は倉庫として利用する。敷地内には11台収容できる駐車スペースを確保した。

一軒家を葬祭会館に改装するにあたって注力したのは、館内の動線づくりだという。

「お客様にとって居心地がよく、自分たちにとって施行がしやすい空間づくりにいちばん苦労しました」と川岸社長が語るように、元の建物を活かしつつ、人の流れを

意識した会館設計にこだわった。

式場となっているスペースには、もともと和室2間と縁側、廊下があったそうだが、柱と床の間以外を取り壊し、1つの部屋に大改修した。一方、キッチンやバスルームなどは以前のものをそのまま活用し、コストをかけるところとそうではないところのメリハリをつけて初期投資を抑えている。

なお、遺族が利用しない4畳ほどのバックヤードスペースは遺体安置室とし、今後増加が予想される安置のみの利用にも対応していくという。

会館開設にあたって購入した一軒家は、不動産会社とのやり取りのなかで紹介された物件だが、「砺



7



8



9



10



11



12

- 7 導師控室（6畳）
 8・9 会館内から望むことができる庭。夜はライトアップする
 10 バスルームは以前の持ち主が改修済なのでそのまま使用
 11 窓だった所にスロープを設置し、棺の搬入や車いすでの出入りを可能にした
 12 専務の三澤遼氏（左）と社長の川岸範裕氏

波市空き家情報バンク」にも登録されていたものだ。

砺波市では近年、高齢化が進行するとともに空き家が増加傾向にあり、21年3月末には489戸が空き家として報告されている。そこで市は砺波市空き家情報バンクを開設し、登録されている空き家を利活用することで補助金を受けられる制度を設けている。

ところが、今回のホームセレモニー苗加邸開設においては補助金を利用できなかった。というのも、その制度は空き家を“賑わいを創出する施設”に活用することを想定したもので、葬祭会館は補助の対象外となってしまったからだ。

しかし、空き家を葬祭会館として利活用したことで周辺住民から、「空き家のままになっているよりは

使ってもらほうが安心」という声もあがっているという。そうしたこともあり、11月には“空き家利活用に興味がある”または“自宅が空き家になった場合の利活用について知りたい”という市民を対象とした「空き家見学バスツアー」を市が主催した際に利活用事例として組み込まれるなど、結果的に防犯面やSDGsの観点から地域創生に寄与していると評価されている。

“居心地のよさ”を強みに認知度アップを図る

7月のオープンから現在までの施行件数はまだそれほど多くはないものの、会館を利用した遺族からは好評で、「ここで葬儀ができてよかった」「こんなにいい会館をどうしたらもっと知ってもらえるの

か」という声もあるという。

「子どもが会館内や庭を走り回る様子や、葬儀が終わっているのにしばらく寛がれている人も見受けられました。各々が好きな場所で、自宅のように寛げる居心地のよさがこの会館の強みだと思っています」と川岸社長が語るように、そういった光景は一軒家を改装した会館ならではの光景。

とはいえ、同会館は一軒家の外観をそのまま活かしていることから、「周囲の景観に溶け込みすぎて、新たな葬祭会館ができたことがあまり認知されていない」と川岸社長が分析するように、今後は折込みチラシや内覧会等で多くの人に会館を知ってもらいつつ、「地域密着で心のこもった葬儀を提供していきたい」としている。